

描画法における全体的印象について

青 木 健 次

On the "Global Impression" in Projective Drawings

AOKI KENJI

I 描画法と全体的印象

1. 全体的印象の重要性

ここでいう描画法とは、描画を介して人格を知ろうとするもので、厳密には投影描画法と呼ぶべきものである。青木（1979）は描画法に関する研究を最近のものを中心として、批判とそれへの反論の動きを巡って広く概説した。この小論ではその問題点の中から描画法の解釈における全体的印象と称される部分を扱うことにする。

全体的印象（global impression）とは文字通り 描画全体から 受ける主観的な 印象のことである。解釈においてこれの重要なことは繰り返し言われている（Albee & Hamlin; 1949, Arbit & Lakin; 1959, Guinan & Hurley; 1965, Tolor; 1968, 山野; 1973など）。解釈について述べた文献でこの重要性に触れていないものはないといってさえよい。たとえば、山野（1973）は経験者、未熟練者、描画法を知らない学生にバウムテスト（Koch, 1949）を見せて適応度を判定させた。その結果、経験者は高成績であったが、未熟練者は学生よりも劣った。山野は、「学生が全体的印象と木の自然さによって判断したのに対し、未熟練者はバウムテストの診断仮説にこだわって重要な点を見落とした」ためであるという。一方、熟練者は全体印象と診断仮説とを適当に組み合わせて診断したという。また、Hiler & Nesvig（1965）も描画における「奇妙さ」、「歪み」等の印象が重要と述べ、患者群の描画では奇妙なものが46%、対照群では2%のみであったという。

描画の解釈指標はその多くが多義的なため、直観で得られた全体的印象に基づいてより適する仮説を拾っていく必要がある。また、特定の個別指標（疲的指標等）はある一定の描画者群においても必ずしも常に現われるものではない。たとえば、Hammer（1959）はいわゆる分裂病指標においても分裂病の人でもそれ程多くは描かない、しかし、出現するのは分裂病の人の描画のみであるという。このような現象があるので個別指標の有無にあまりこだわってはならず、全体的印象を大事にしなければならないのである。また、心理療法の流れの中で描画を媒介に会話をしていく場合には、治療者がボツンと感想を述べるのが有効であったりする。

2. 全体的印象の研究法とその欠点

全体的印象はそれが主観的であるだけに捉え難い面があるが、1つの方法は形容詩対などを用いて比較していくやり方である。先の Hiler & Nesvig（1965）の研究もこれに含まれ、評定者間の一致度で信頼性をおさえることが多い。これにさらに形容詩対を増やして SD 法や因子分

析法を用いていくこともある。たとえば、一谷 (1979) がバウムテストで一連の研究を行なっている。

もう1つの方法は直観的判断で同一人の描画を組み合わせたり、描画のみで一定の診断を下したりするもので、前者を matching, 後者を blind analysis と呼ぶ。blind analysis 研究には青木 (1979) が述べたように多くの否定的研究がある。多くの場合、判定者は絵の出来映えに左右されて誤った診断を下している。ここでは Wanderer (1969) の否定的研究と Hammer (1969) の反論を中心に研究法上の課題を論じたい。

Wanderer の研究では描画者は精神病患者、神経症者、精神発達遅滞者、同性愛者、対照群各5名である。これらの人物画のコピーを作りランダムに抽出して各群1名計5名のセットを20組作り、人物画の専門家20名が判定した。全体では約40% ($p < .001$) の正答があったが、発達遅滞者のみ正答率が高く (95%) これを除くと他の判定は有意水準に達しなかった。経験との相関も否定されている。彼は人物画では診断はできない、事例報告などの肯定的報告は面接や生活史から既に知っていた情報を描画の中に見ていただけと批判している。

Hammer (1969) の反論はまず多数の肯定的研究を列挙した後、多くの問題点を指摘している。①判定者がそれぞれ違う描画セットを判定しておりこれでは経験差を論じることができない。②強制選択では1つ間違えると自動的に2つ違う。③被験者群が不鮮明で重なり合う部分がある、同性愛者で神経症的な人はまれでない、④分裂病者群といっても下位分類があり、均質な統一体ではない。⑤描画のみでの判定は多くの情報を総合するという臨床の実際と矛盾する。さて、このうち①と②は改良しうるが、③や④は臨床心理学のいずれの研究にもつきまとい解決は非常に困難である。⑤をうまく示す方法も今のところない。Hammer はさらに投影法研究の困難さとして、①投影法では人によって異った側面が現われるので比較がむずかしい、②投影法は心の深層を探るのを目的とするので深層と表層が食い違う時は妥当性の基準がとり難い、などをあげている。これだけではどうにも弁解じみているが、彼は科学者として臨床家として、臨床も研究も共に無視できないと結論している。もっとも具体的方策は示されていないが。

さらに Blatt (1975) の方法論的批判がある。曰く、主観的判断の実験では、成功にしる失敗にしる、なぜ、あるいは、どうしてその結果になったか全然わからないと。彼は公平にも特定のスコアに基づく研究には他の諸要因、全体の脈絡の無視という欠点があることも指摘している。

さて、以上多くの難点をあげたが、では何故投影法を研究するのかということになる。Blatt (1975) はその理由として、臨床心理学者の中での科学者と臨床家のせめぎ合いを投影法研究が解決しうることを述べている。投影法は臨床現象を総合的にかつ客観的に捉える上で多くの期待が寄せられているのである。

本論文の主題である描画からの全体的印象の研究は主観的判断をいくらかでも客観的に捉えようとする点で科学者と臨床家の境目である。心理療法において共感と呼ばれる治療者の心の動きが重要とされている。これは相互性、共通性をも必要とするが、きわめて主観的なできごとでもある。面接で受ける印象と描画から受ける印象は等しいとはいえないにしても共通な部分も少なくあるまい。描画法の活用のためにも人間の主観的判断の分析のためにも全体的印象の研究は必要なのである。先述した多くの難点はできるところから解決していくのが实际的であろう。完全なる研究法というものは、この領域においては、今のところ望みえないのだから。

II Matching

1. 問 題

matching とは、ある判定者が、同一人がある期間をおいて描いた（と思われる）描画を組み合せることであり、全体的印象の再検査信頼性研究の1つに含まれる。判断基準は判定者の自由にまかされており、あとから内観報告として判断の理由を尋ねることが多い。もし同一人と有意に正しく判定できれば、その描画は描き手についての何らかの情報、その人らしさを有していたことになる。ただし、Anderson & Anderson (1951) が批判しているように、このやり方では描画の特徴と人格の特性との対応は全く考慮に入られていないので、人格検査としての描画法の信頼性研究にはまだ不十分である。しかし、人格特性の判断は描画の特徴に基づいてなされるのであるから、描画の特徴の安定性を知ることは再検査信頼性研究の第一歩としては必要なものだろう。

一般に matching 研究で問われる仮説は、①描画の中に描画者を反映するものがあり正しい組み合わせができる。②描画法の経験者は投影されているものを読みとることができ、未経験者に比べて成績がよい、の2点である。これまでの研究から、人物画 (Machover, 1949)、家族画 (Hulse, 1952)、家屋画 (Buck, 1948) での matching の結果を一覧表にして表1に示した。

表1 各描画法毎の Matching 平均正答数 (20組中)

研 究 者	描画間隔	種 別	描 画 者	正 答 数		
				上	中	下†
Guinan & Hurley (1965)	5 週 間	人 物 画	大 学 生 (男・女)	19.3	18	12
河 田 祐 子 (未発表)	2 週 間	家 族 画 (色)	幼稚園児 (男・女)	17	17	19
山 口 素 子 (未発表)	2 週 間	家 屋 画	高 校 生 (男)	—	15.5	14.5
青 木 健 次	1 週 間	樹 木 画	高 校 生 (男)	—	12	8.5

† ; 判定者の経験の長さ, 上 ; 熟知者, 中 ; 既知者, 下 ; 未知者

いずれも一定期間をおいて描いた20人の描画を matching したものである。比較のため今回の実験の結果(樹木画)も含めてある。なお、この条件で6人以上正答する確率は $p < .001$ 以下である。描画があるその人らしさを持ち、正確な組合せができることはまちがいない。経験の差には Guinan & Hurley (1965) が肯定的方向で触れて

いるが、いずれの研究も判定者数が少く(各群2~3名)結論を出すには至っていない。仮りに Guinan & Hurley と河田からは経験が中程度の者を除き、各研究者毎に成績を平均点で2分してみると表2のようになる。まだ人数が少ないが $\chi^2 = 3.6$ ($df = 1$) で p は .05 よりやや大きい位になる。どうやら経験者の方が成績がよいらしいがまだ断言はできないし、「経験者は何故成績がよいか」という疑問に答える必要が残っている。

内観報告では、家族画の判定には全体的印象、各部の描き方、色の使い方、人物の大きさ、人数などが根拠として使われ、家族画では全体的印象、線の性質やうまさ、立体視の正確さ等とな

表2 経験の有無と成績 (人数)

	経験あり	経験なし	計
高 成 績	6	2	8
低 成 績	3	7	10
計	9	9	18

注、平均点の者は低成績に含めた。

っている。やはり全体的印象が重視されている。しかし、河田によると「各描画によって手がかりとなった部分が違う」という。内観報告では、着眼点のいくつかを見い出すことはできても、確実なことはいえず、Blatt (1975) の「何故成功したか失敗したかわからない」という批判には答えられていない。もっとも河田の結果は殆どの判定者が高成績をあげており、判定者は描画毎に着眼点を適当にかえつつ正しい判定ができたわけである。どこに着眼すべきかは描画法の利用には最も重要な課題である。

この実験の目的は、①これまで matching 結果の出ていないバウムテストについてその正答数を求め他の描画法と比較すること、②操作によってどの程度正答率の低下が生じるかみること、成功失敗の過程をいくらかでも知るために、③判定者に「自信のあるもの」をあげてもらいその正答率をみること、④判定の一部に合議による集団判定を取り入れ個人の成績と比べること、などである。

2 実験

(1) 方法 描画者は男子高校生。1回目は高校1年の春で、教示は「実のなる木を1本描いて下さい」であった。2回目での条件によって次の3セット各20対とした。Aセットは間隔1週間で2度目も普通教示、Bセットは間隔は同じだが2度目には普通教示の他に「これは生物のテストで厳密に採点されます」と加えた。Cセットは間隔が1年半と長く2度目は高校2年の秋である。思春期の1年半は人格的にも様々の成長変化が生じるから、再検査信頼性とはいいいがたい。ただ、描画の中に現われるその人らしさがどの程度安定したものかを検討するために加えた。

判定者はある臨床心理学講座の博士課程の者2名、修士課程2名、集団判定は修士課程者5名で個人判定をした2名を含む。彼ら2名は個人判定の後集団判定に参加した。いずれの者もバウムテストに特別に経験があるというわけではない。ただ、同講座では同テストが臨床活動で用いられているので、博士課程の者の方がいくらか詳しくなっている。

判定には原画を用い、各セット毎に行なった。教示は「これらはある間隔をおいて同一人が描いた描画で、こちらが1回目でこちらが2回目です。セットの説明一略。同一人が描いたと思うものを対にして下さい。時間や方法は別に制限しません。」であった。判定終了後「自信のあるもの」を若干あげてもらい、「どう判断したか」内観報告を求めた。

なお、補助的実験として、判定自体の信頼性を検討するために同一人（修士課程の者）にBセットで2度 matching を行った。もう1つは、他の実験での判定者としての経験から、20対の判定を行う時でも一目瞭然のものがかなりあり、本当に考慮のいるのはその残りであることが判明した。Bセットに対応した描画者で1回目30枚、2回目60枚（同一条件下の別の30枚を含む）の困難課題を作った。判定者は臨床心理学の教官2名であった。

(2) 結果 結果はまとめて表3に示した。だいたい10前後の正答数であった。CセットでもAセットと変らぬ成績であるのは興味深い。集団判定に参加した2名の個人判定での成績はAセット(8, 9), Bセット(3, 7)であった。集団では正答数がふえているが、個人判定と集団判定の正誤をAセットについて分析し表4に示した。個人では2人共正答しながら集団では誤答だったりもした。ただ、集団では「自信あり」とした12判定が全て正答であった点は注意したい。個人判定では23中14正答(61%)でしかなかったのが、合議によって個人的な「思い込み」が修正されている。同一人の再判定では1回目の正答数7、2回目10で、同じ組み合わせは6でうち正

青木：描画法における全体的印象について

表3 バウムテストの Matching 平均正答数

描画セット	描画間隔	操 作	個 人 判 定		集 団 判 定
			博 士 課 程	修 士 課 程	
A	1 週 間	な し	12 (13-1)†	8.5 (9-3)	11 (4-0)
B	1 週 間	あ り	10 (8-3)	5 (5-6)	11 (8-0)
C	1 年 半	な し	12 (10-0)	9.5 (13-5)	—

†；() 内は“自信あり”としたもののうち正答と誤答数の計である。

表4 個人判定と集団判定の比較, Aセット

		個 人 判 定			計
		両者正答	片方正答	両者誤答	
集団	正 答	3 (2)†	5 (2)	3	11 (4)
	誤 答	1	4	4	9
計		4	9	7	20

†：() 内は“自信あり”とした内数

答が5, 変化したのが14 (正→誤2, 誤→正5, 誤→誤7)であった。2度とも5個を「自信あり」, としたが, 2つは同じ (正), 3つは変化 (誤→正) した。この程度の力量の者の判断はかなりうつろいやすいといわねばならない。確実に正答するもの, 高い確率で当るもの, 偶然でのみ当るものとわければ, この判定者では確実なのは3ということになる。

困難課題での2人の判定者の正答数は9, 10であった (この条件では5以上は $p<.001$)。正答率は低いがこの条件では「確実なものは除いて残りで考える」方策が全く使えないので確実な正答が約3とみなしてよいだろう。

3 考察

表1をみると人物画と家族画が最も高成績で, 特に家族画は未知者でも殆ど正答である。次に家屋画, 最後が樹木画 (バウムテスト) となっている。これがそのまま描画法としての再検査信頼性を示すわけではないが, 利用の際にはバウムテストは習熟を要するだろう。ただし, 研究によって描画者の違いがあるのでそれを考慮する必要がある。つまり, 人物画と家族画では描画者に男女が含まれているので判断が下しやすいわけである。また, 高校生では自分の能力を示すために2回目には意図して描画を変える傾向がある。樹木画や家屋画では主題を変えるとかなり変化するので難しくなったのであろう。逆に幼稚園児は表現力にまだ乏しく一定の描画しかできないので判断しやすい。この実験でAセットとCセットが同程度の成績なのはAでの意図的变化とCでの成長による変化と相殺したためであろう。したがって各描画法毎の matching の難易度を探ることは諸条件を同一にした研究を待つとして, ここではいずれも有意な正答率ということでよしとしたい。

だが, バウムテストが特有の困難さを持つことは事実で, 樹種が変わるとガラリと描画が変わることが多い。とりわけ, ヤシやブドウなどの特殊な樹型のものは構図等も大きく変わってしまう。そして経験の効果がこのあたりにかかわってくる。外見が変わっても線の性質等の変らない部分を読み取ったり, 特定の特徴が姿を変えつつ持ち込まれるのを解釈する必要が生じるからである。

2 度目の描画に教示等によって操作を加えると当然のことながら正答率が下る。山口(未発表)が家屋画で操作した描画との matching を行っている。描画者は男子高校生で、2 度目には「住みたい家」を描くよう教示した。平均正答数は既知者 8, 未知者 6 となっており、今回の実験結果に近い。ここでの問題も描画の自発的变化をどう読み取るかということと同じである。仮説としては、経験者は未経験者よりも変化の中の同一性を見い出す力において勝り、未操作のものからの成績低下が少ないということである。今後の研究を要する部分であり、内観報告等を細かにとることで、「どこが変わってどこが変わらないか」と描画要素中の安定した部分を拾い出すことができよう。最終的に「どういう人がどう変えるか」まで理解できれば、描画法の欠点のある状況等による変わりやすさ (Tolor, 1968) を逆に人間を多面的に捉える上での長所とすることもできよう。

最後に未知者の判定のあやふやさにふれておきたい。再判定をしたのは 1 名であるが、個人→集団判定においてもかなりの変化がある。また、「自信あり」としたのものにも誤答が多い。描画は非常に多くの解釈指標を全体として持っているが、1 枚の描画にはその一部が現われるだけである。未熟練者はまちがった、そしてあてにならない「思い込み」をするようである。しかし、それが集団判定の合議(約 40 分)で美事に修正され「自信あり」は全て正答となった。何人かの人間が共通して納得することは非常に深い意味があるといえる。これはまた、描画法の利用面では訓練の有効性を多いに示してもいる。

III Blind Analysis

1. 問題

blind analysis は描画のみで何等かの判断が下しうるか否かを問うもので、全体的印象の妥当性研究の 1 つに含まれる。Hammer (1969) の言うように実際の臨床場面では描画のみで判断がなされることはない。しかし、生活史等の他の情報があって描画が新たなものをいくらかでも加えうるならば、描画のみでもいくらかの判定は可能であろう。

この実験ではバウムテストとその変法の Drei Bäume Test を対象とする(以下 BT, DB と略記)。この変法は 1 枚の描画では描画者の一面しか捉えられない欠点を補うために、3 枚のバウム画を「なるべく違うようにして」と教示を与えて連続的に実施するものである。たとえば、Caligor (1952) はパラノイドを対象として 8 枚の描画を繰り返すことで、1 枚の人物画中にはパラノイドサインが被験者群の 25% にしか現われないのに、8 枚重ねると 85% に見い出しえた。また、この変法では描画を変える能力が適応度で大きく変えることは既に発表した(青木, 1977)。つまり、イメージや表現様式の多様性が診断的に重要な手がかりとなるのである。

Hammer (1969) の blind analysis 研究への批判のうち 2 点に注意を払った。つまり、判定者全員が同じ描画を判定するようにし、各診断カテゴリー毎の人数を制限しなかった。また、描画への状況因子の介入しやすさ (Tolor, 1968) を考慮して実施は全て実験者が行い、一般の臨床場面になるべく近い状態を守った。

仮説 1. BT, DB は診断的妥当性を持ち、経験者はより正しく判定する。

仮説 2. DB は BT よりも正しく判定される。

2 実験

(1) 方法 描画者は予備校の生徒10人 (18~21才), 神経症者 9 名 (17~35才), 分裂病者10 名 (18~35才) でいずれも男性であった。予備校生は実験者がカウンセラーとして勤務していた予備校の相談室に進路問題等で来室した者のうち, 心身共に健康と判断された人達である。神経症者は森田療法を行う病院の入院患者で, 主に心氣的強迫的症状を持つ人達である。抑うつ神経症者は除外した。分裂病者はある精神病院の入院患者及び若干の通院患者で, 比較的病像の安定した人達であった。病型は判然としない人が多かった。

描画法の実施は全て個人法で行い, 実験者が担当した。DB の実施手続きは1枚目は普通のBTと同様に「実のなる木を1本描いて下さい」と教示した。その裏に Circles Test (Cottle, 1967) を行った。次に2枚目の用紙に「1枚目とはなるべく違うようにして」, 3枚目には「1枚目とも2枚目ともなるべく違うようにして」と教示して BT を実施した。なお Circles Test とは3つの円を描いて過去, 現在, 未来を感じたままに表現してもらおうテストである。ここでは繰り返しバウム画を描かされるのだという構えを描画者が持って, 漸次バウム画を変えることのないために1枚目と2枚目の間に実施した。

(2) 判定実験 判定者は大阪バウムテスト研究会の会員20名 (医師, 病院勤務者, 教員など, 男性11名女性 9 名) であった。20人をBTの経験を4年以上持つ人10名とそれ以下の人10名に2分し, 前者を長経験者群, 後者を短経験者群とした。

判定にはまず1枚目のバウム画 (BT にあたる) を呈示し, 3件法で判定を求め, 次に3枚のバウム画 (DB にあたる) を順次呈示して判定を求めた。呈示は原画のまま行い, 呈示順はランダム化した。名群の人数は約10名とのみ知らせ, 判定用紙には32番まで書いておき帳尻合わせが生じるのを避けた。教示は「これから予備校生, 神経症者, 分裂病者が描いたバウム画をお見せします。各群の紹介一略。DB の実施手続の説明一略。まず, 1枚目のバウム画をお見せしますから3群のうちいずれかに判定して下さい。ついで3枚ともお見せしますからもう一度判定して下さい。なお, 各群の人数は必ずしも等しくありませんから思ったままに判定して下さい」であった。

(3) 結果 20人の判定者のうち12人以上が一致した ($p \approx 0.5$) したものを一致判定とした (表5)。BT では29の描画中18 (62.1%) が, DB では13 (44.8%) が一致判定であった。そのうち正しい判定が BT で8, 後者で5である。BT でも DB でも一致して同じ判定だったものが9あり, そのうち4が正しかった。全員が一致したのは DB で一度 (分裂病者一適中) あっただけである。群毎にみると神経症者で一致度が低く, 分裂病者で一致している割に正しくない。平均一致者数は BT が12人, DB が11.5人であった。いずれにしても, 一致度の割に正しくなかった。

BT の全判定580 (29×20) のうち適中は224 (38.6%) で $p < .05$ で有意に正しい (表6)。し

表5 判定の一致とその正しさ, 一致した判定数

	予備校生	神経症者	分裂病者	計
バウムテスト	10 (5)	2 (1)	6 (2)	18 (8)
D B テ ス ト	4 (2)	2 (1)	7 (2)	13 (5)

() 内は正しい判定数

京都大学教育学部紀要 XXVI

表6 バウムテストの判定

判定 群		判 定			計
		予備校生	神経症者	分裂病者	
描 画 者	予備校生	91 (41)	63 (35)	46 (26)	200
	神経症者	58 (26)	61 (34)	61 (34)	180
	分裂病者	73 (33)	55 (31)	72 (40)	200
計		222	179	179	580

人数, () 内は判定に占める比率; %

表7 DBテストの判定

判定 群		判 定			計
		予備校生	神経症者	分裂病者	
描 画 者	予備校生	76 (41)	57 (32)	67 (31)	200
	神経症者	57 (31)	61 (34)	62 (29)	180
	分裂病者	52 (28)	62 (34)	86 (40)	200
計		185	180	215	580

人数, () 内は判定に占める比率; %

かし適中率は低く, 神経症者は特に低い。この結果を4分割表に組みなおして, 予備校生か分裂病者かの判定を検討すると $p < .01$ で有意, 予備校生か神経症者かの判定では $.05 < p < .1$ で傾向が認められた。神経症者か分裂病者かの判定は有意ではなかった。また, 神経症者と分裂病者をまとめて不適応者群とすると, この不適応者群と予備校生群の判定は $p < .01$ で有意に正しかった。

DB の全回答580のうち適中は223 (38.4%) で $p < .05$ で有意に正しい (表7)。BT と比較すると分裂病者という判定が増えているのが注目される。4分割表では予備校生か分裂病者かの判定が $p < .01$ で, 予備校生か不適応者かの判定が $p < .05$ で有意に正しかった。予備校生か神経症者かの判定, 神経症者か分裂症者かの判定はいずれも有意ではなかった。

なお BT でも DB でも適中した判定は163で, BT のみ適中した判定が81, DB のみ適中した判定が80あった。判定の移動は少なくなかった。

長経験者は BT, DBともに $p < .02$ で有意に正しい判定であったのに対し, 短経験者群ではいずれもチャンスレベルであった (表8)。両群の差をT検定で処理すると BT では長経験者群が $p < .01$ でよい成績であった。しかし DB では有意とならなかった。これは長経験者群内で成績に大きなバラつきが生じた (全群の最高成績も最低成績も長経験者) ためである。

表8 経験による判定の差

	長 経 験 者	短 経 験 者
バウムテスト	121 (41.7)	103 (35.5)
D B テ ス ト	120 (41.4)	103 (35.5)

() 内は適中率

BT と DB を比較すると、これまで述べてきたように判定者を群としてみると診断的妥当性には全く差がない。しかし、判定者を個人別にみていくと、BT では最多適中者で29の描画中14 (48.3%) の正答で有意な水準に達しなかった。一方、DB では適中数16 (55.2%, $p < .05$) が2人、15 (51.7%, $.05 < p < .1$) が1人いた。これらはいずれも長経験者群であった。また DB で長経験者群の成績が大きく乱れたのも興味深くはある。短経験者群はチャンスレベル付近にまとまっているのに対し、長経験では何らかの仮説に基いて判断し、正しかった者は成績が伸び、誤った者は低下したのであろう。

3 考察

仮説1は支持され、仮説2は否定されたわけである。まず判定の一致度＝判定者間信頼性をみると相当に高かった。同一の研究会の会員ということで判定者はかなり共通の判断基準を持っているようだ。それはよいのだが、問題は一致した判定のうち42%しか正答していないことである。それでも全体の正答率よりはいくらかましであるが、まだまだ判断基準は研ぎすます必要がある。一致して正しく判定しえた描画、誤った描画についてどの要因が関連したかを厳密に検討しなければならない。その1つは簡略な描画を成人省略画とみなすか、病的な貧困さとみなすかというあたりにあるらしい。なお、これらの描画の検討は別の機会に行ないたい。

BT、DBともに適中率は低いものの統計的に有意なレベルで正しい判定を下しえたのであるから、両描画法に診断的妥当性ありと結論してよいだろう。ただし、判定を描画者群毎にみていくと神経症者群は完全にチャンスレベルである。何らかの基準で最もよい描画を予備校生、最も悪い描画を分裂病者と判定したことが推測される。そのために中間の神経症者群で適中率が低かったのであろう。臨床場面ではさらに多くの診断カテゴリーが存在するので、BTもDBも特定の診断名への判定を云々できる程には敏感ではない。もっとも、描画法は元来補助手段であり、Arbit & Lakin (1959) のいうように大まかな総合的な判断に用いられるのであるから、これだけの情報が読み取れば十分と考えるべきである。

BT と DB とを比較してみると判定者を群として扱う限りでは全く差がなかった。DB では「なるべく違うようにして」と教示しての描画なので健康な人でも極端なものが生じやすい。結果では DB の方が分裂病者という判定が増加しており、意図された変形バウム画は悪く解釈されたようである。しかし、青木 (1977) が示したように、変化は原則としては人格の柔軟性として肯定的に解釈すべきものと思われる。個々の描画では唯一全員一致して正答した例は DB であったし、判定者で有意水準に達した者が若干いた。イメージの多様性と表現の可変性を通じて人格を捉えようという DB の活用の可能性がこのへんに窮える。

BTにより長い経験を持つ者が短い者よりも正しい判定を下しえたことは、このテストが習熟によって上達することを示している。しかし、Blatt (1975) がいうように、この結果からは経験によって描画を見る目がどのように鍛えられるかを知ることは難しい。内観報告を細かにとることは1つの方法ではあるが、全体的印象については言語化しえないものが多いし、描画毎により所とした特徴が変ることも多い。全体的印象の受容力が増すとしたら、それは何によって可能なのか。山野 (1973) のいう「全体的印象と診断仮説を適当に組み合わせる力」(傍点青木)が増すとして、それは何なのだろうか。

手がかりの1つは DB で最高得点の判定者が BT に長い経験を持つことに加えて、心理療法

にも長く携わっていた点である。描画の解釈では全体的印象を「幹」として、多義的な解釈仮説を適切に拾い上げて「枝葉」をつけ、ある何等かのまとまりを持った人物像を描きあげていく。この過程は心理療法のごく初期と似かよった面を持っている。単に経験で2分するのみでなく、判定者側の要因を分析して、経験とは何かを解明していくことが大事であろう。

さて、誰もがいうように、描画のみで診断が行なわれることは実際にはない（なおここでいう診断とは単に診断名の決定のみではなくより広く性格の仮説等も含む）。描画の解釈だけでも描画者の発言や表情等も含めた広義の行動からの知見が参照されるし、診断を下すまでには必ず面接や他のテストからの情報と重ね合わされる。他の情報に描画法を加えることでいかなる新しい情報が得られ、それが治療仮説の検討や予後の予測にどのように寄与しうるかを明らかにする研究が今後必要となろう。

IV 結 論

バウムテストを用いた2つの実験によって、全体的印象という、描画についての主観的判断がある程度あてになることが明らかとなった。また、単に同一人が描いた描画を組み合わせる(matching)場合にも、描画から何らかの診断的情報を読み取る(blind analysis)場合にも経験によって描画を読みこなす能力が上達する事も示唆された。未熟者の個人的な「思い込み」が合議によって修正され、研究会活動を重ねることで共通の診断基準に達しうることも判明した。いわばカンにちかいものでもある全体的印象として、描画の情報を読みとる技術は明らかに存在し、また、それは上達しうるものである。Watson (1967) や Cresson (1975) の批判、描画での診断には判定者間の一致もなく正しくもない、判定者は描画の上手下手をみてるだけ、にはこれで実験の根拠をもって答えたことになる。

ただし、それは診断や心理療法における補助的手段であるという、描画法の役割を前提としている。1枚の描画中にはその描画者の一面しか現れない欠点を、3枚の描画を繰り返すことで補正しようと試みた Drei Baume Test には若干の可能性が示されたが、それが約3倍の時間を要するに値するだけの情報を得うるかは今後の研究課題である。

この研究では matching と blind analysis という方法を用いた。だが、いずれの方法にも欠点があることは既に触れたとおりである。そして、投影法の研究では何を妥当性の根拠とするかが常に大問題となる(Blatt, 1975)。Hammer (1969) の反論にもあるが、基準としての診断名の使用には多くの批判があることは別に述べたことがある(青木, 1977)。Blatt (1975) は投影法研究では群間比較や予測的妥当性の方法には批判的で、事例の理解を深めるための再構成という方法を述べている。しかし、これには Wandrer (1969) の「既知の情報の読み込みすぎない」という攻撃がある。

投影法としての描画法が実際の臨床場面でどれだけ役に立つかを明らかにするのは本当に難しい。それには人間理解の中で果す心理テストの役割、その中での投影法の意義(鬼丸, 1979)、さらにその内での非言語的で表現的な描画法の任務を追求していかなければならない。この研究で描画法が役に立ちうることは示された。ではどのように役立つかを明らかにするのが今後に残されている。

人間理解、それもなるべく全体的な理解という臨床心理学の目標から考えるならば、描画法も

多くの道具の1つとしてその個有の任務を果たせば十分である。たとえば、今回の blind analysis 実験の描画者29人のうち1人についてであれ描画法を用いた意味があり、つまり描画によって始めて新たな情報が得られ、20人の判定者のうち1人でもそれを確信できるならば、あとは習熟すればよいのだから、描画法は十分役立つというであろう。

引用文献

- Albee, G. W. & Hamlin, R. M., 1949 An investigation of the reliability and validity of judgements of adjustment inferred from drawings. *Journal of Clinical Psychology*, 5, 389-392.
- Anderson, G. L. & Anderson, H. H. 1951 An introduction to projective techniques. Prentice Hall Inc.
- 青木健次 1977 バウムイメージの多様性と人格 日本心理学会第41回発表論文集, 960-961.
- 青木健次 1979 投影描画法研究の動向 京都大学教育学部紀要, 第25号, 209-222.
- Arbit, J. & Lakin, M., 1959, Clinical psychologists' diagnostic utilization of human figure drawing. *Journal of Clinical Psychology*, 15, 325-327.
- Blatt, S. J. 1975 The validity of projective techniques and their research and clinical contribution. *Journal of Personality Assessment*, 39, 327-343.
- Buck, J. N. 1948 The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, 4, 317-396.
- Caligor, L. 1952 The detection of paranoid trends by the 8 Card Re-Drawing Test. *Journal of Clinical Psychology*, 8, 397-401.
- Cottle, J. J., 1967 The circles test: an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques & Assessment*, 31, 58-71.
- Cressen, R., 1975 Artistic quality of drawings and judges evaluations of the DAP. *Journal of Personality Assessment*, 39, 132-137.
- Guinan, J. F. & Hurley, J. R., 1965 An investigation on the reliability of human figure drawings. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 29, 300-304.
- Hammer, F. E. 1959 Critique of Swensen's "Empirical evaluations of human figure drawings." *Journal of Projective Techniques*, 23, 30-32.
- Hammer, E. E. 1969 DAP: Back against the wall? *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 2, 151-156.
- Hiler, E. & Nesvig, D. 1965 Evaluation of criteria used by clinicians to infer pathology from figure drawings. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 520-529.
- Hulse, W. C. 1952 Childhood conflict expressed through family drawings. *Journal of Projective Techniques*, 16, 66-79.
- 一谷彊 1979 S-D 法による Baumtest の因子的検討VI 日本心理学会第43回発表論文集, 682.
- 河田祐子 未発表 幼児の家族画に関する研究 京都大学教育学部卒業論文
- Koch, K. 1949 Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Hans Huber, Bern u. Stuttgart.
- Machover, K. 1949 Personality projection in the drawings of the human figure. Springfield, Illinois: C. C. Thomas.
- 鬼丸正己 1979 心理テストとその臨床に関する一考察 女子大学社会福祉評論, 第46号, 1-21.
- Tolor, A., 1968 The graphmotor Techniques. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, 32, 222-228.
- Wanderer, Z. W. 1969 Validity of clinical judgements based on Human Figure Drawings. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 2, 143-150.
- Watson, C. G., 1967 Interjudge agreement of draw-a-person diagnostic impressions. *Journal of Proje-*

京 都 大 学 教 育 学 部 紀 要 XXVI

ctive Techniques & Personality Assessment, 31, 42-45.

山口素子 未発表 House 画の安定性について 京都大学教育学部卒業論文

山野保 1973 変形した樹木画描写の心理 林・一谷編著 バウムテストの臨床的研究, 163-297. 日本文
化科学社

(本学部助手)